
Raison D'etre

青海空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R a i s o n D ' e t r e

【Nコード】

N 6 6 5 6 R

【作者名】

青海空

【あらすじ】

「人って生まれたから生きているのだと思う？ それとも、生きるために生まれたのだと思う？」

ある日の、ある夜。

ある少女が俺に尋ねた疑問。

その疑問に俺は――

（前書き）

文学としましたが、この話は、主人公が少女と出会い、人が生きて
いる理由を考え直す、という話です。

高1が考えたような小説なので、文学には程遠いかと思いますが、
読んでいただけると嬉しいです（^^）

「人って生まれたから生きているのだと思う？ それとも、生きるために生まれたのだと思う？」

奈月なつきは、砂浜に落ちていた巻貝を蹴り飛ばして俺に聞いた。蹴り飛ばされた巻貝は放物線を描き、海にポチャンと入水する。

奈月の漆黒の長髪が海風に靡いた。海は月光を反射して、神々しさを滲み出している。

「ねえ……どっち？」

今まで海を見ていた奈月はこちらに振り返り、質問の回答こたえを催促した。

余りにも重すぎる質問の回答を。

——生まれたから生きているのか、生きるために生まれたのか、か。

どちらかと言うと、後者の方がプラスのイメージ。

「俺は——」

はあ。

こんなクソ寒い中、イルミネーションに彩られた町を連れ回された拳句、どうしてこんな小難かしい質問をされなくちゃなんのだ。

「……………」

奈月は俺の回答こたえを黙って待っている。

仕方ない。約束してしまったからな。

今更だが、どうして俺はこの女とあんな約束をしてしまったのか。……そんなの俺自身が一番良くわかってるよな。今さら何言ってるんだか。

事は二時間程前に遡る。

.....
.....
.....

波が海岸に打ち付けられる。
ザプウン。ザプウン、と。

潮が砂浜から引いていく。
ズザー。ズザー、と。

この街を象っていると言っても過言ではない音の旋律。そんな旋律とも今日でお別れ。

別に悲しくはない。

それは、海の音が嫌いだから、などということではなく――逆に波の音を毛嫌いする方が珍しい――、俺がこの街に一ヶ月近くしか住んでいなかったからだ。

俺の母親は俺を生んだ後、命を絶ったらしい。

特別母親の死に興味があるというわけではないから、俺はその事実をただ認識している。

母親には申し訳ないが、俺は母親の顔さえもしらないのだ。「悲しめ」という方が無理がある。

そんな俺をここまで育ててくれたのは、紛れもなく親父である。男手一つで一人の息子を育ててきたのだ。さぞかし、大変だっただろう。だが、親父は真面目な性格の割に仕事場から解雇されることとがしばしば。こんな風に引っ越しをするのも、もう何回目のことか。

だが、所詮俺は育ててもらっている身。そんな親父に反論すること

となんか筋違いも良い所だ。

こんな転校を繰り返している俺。決まった友達なんかいない。どうせ、またすぐに別れるのだ。わざわざ絆なんか結ぶ必要はない。親しくなんかしたら、逆に別れるのが辛くなるだけだ。

だから俺はクラスでは浮いた存在に自ら進んでなっていた。

「はあ」

そんな毎日を過ごす日々。こんな毎日に価値なんてあるのだろうか？

俺の存在理由って何なんだろう？

俺は目の前に広がる大海原に問いてみる。もちろん、返事なんて返ってこない。

夜の海は孤独だ。そして、荒々しい。

今俺が海に飛び込みでもしたら、あつという間に波に飲み込まれ海底へ沈んでいくだろう。浮かび上がるのは、魂の抜けた俺の肉体のみ。魂は、異世界へご招待されてしまう。

死ぬって、どういうことなんだろう？

それは、今までにも何度が思い浮かんだ疑問。

今までは、途中で馬鹿らしくなって考えるのをやめていたが、今日は違う。

俺は生きる価値があるのだろうか？ 逆に死んだ方がいいのではないだろうか？

親父も俺がいない方が楽だろうし。悲しんでくれる者など誰もいない。

俺は砂浜へと歩を進めていく。

昼の海と夜の海は、まるで人が変わったかのごとく対照的だ。夜の海は、つい恐慌してしまいたくなるように冷たい。

その海へと、俺は着実に歩を進める。

「！」

波打ち際には人がいた。

俺は気取られない程度に、その人を観察する。

後ろ姿から見るに女だと見える。背中にまで及ぶ漆黒の長髪が月明かりに照らし出されていた。

同じ年くらいだろうか？

後ろ姿だけ見るに、その女は若い感じがした。俺はその女の隣に立ち、あくまで海を凝視する。

「ねえ」

女が突然俺の方を向いた。

「何だ？」

「付き合って」

「は？」

いきなり何を言い出すかと思えば。逆ナンパか？ いや、待て。付き合うの意味は他にもある。

「何に、だ？」

だから俺は、もう一つの意味だと仮定した質問の仕方を取った。

「ふふ。そちらの意味で取るなんて、意外と謙虚なんだね」

「俺は自分に自信がないからな」

女はクスツと微笑む。

「ねえ、私と付き合わない？」

む。

これはあの意味の方には取れないな。

……って、ホントにそっちの意味だったのかよ。

「マジで言ってるの？」

「マジで言ってるの」

女は俺の手を握って「お願い」などと言い出した。

……容姿は悪くないと思う。むしろ、かなり可愛い部類に入るだろう。

大和撫子を思わせるような長い黒髪と整った顔立ちは、10人す

れ違えば、9人——全員が振り返るかとはわからない——が振り向いてしまうほどのものだ。

「何で俺？」

「一目惚れした、ことにしといて」

「……付き合わないきゃいけない理由でもあんのか？」

「お願い」

女は質問には応えずに、ただ涙目になって俺に哀願する。

何で、こんなに必死なんだこいつは。

「一生に一度のお願いだから」

ズキッ。

その言葉を聞いた瞬間。

俺の頭に激痛が走った。

くそ。何で……どうしてこいつは……

美咲と同じことを言うんだ。
みさき

美咲——今は亡き、俺と付き合っていた人。

死ぬ直前に美咲が言った言葉。今でも脳裏に焼き付いて剥がれない。

——ねえ。一生に一度のお願いだから。

俺は、美咲の一生に一度の願いを叶えることは出来なかった。あの時の悔しさは今でも忘れない。

愛する人の最期の願いすらも叶えてやれない、余りにも無力すぎる自分が悔しくて、情けなくて、惨めでたまらなかった。

あんな思い、もう二度としたくない。

「馬鹿野郎」

「え？」

「一生に一度の願いなんて、簡単に言うんじゃないよ」

美咲のことを案じて震えながら話す俺を、女はどんな風に思うだろう？

「簡単じゃないよ」

「は？」

思わぬ切り返しに、俺の声が裏返る。

「私、近い内に死ぬの」

サラッと女は言った。

「お前、今何て……」

「うん。死ぬんだ私。ホントは外出なんて許されてないんだけど、病院抜け出してきたの」

じゃあ、こいつは……ホントに一生に一度の願いなのか。

「でも、だったら何故？ 何でそんな大事な願いを、俺に託すんだよ？」

「わかんない」

「わかんないって……」

俺は呆れて物も言えない。

「でも、あなたなら叶えてくれる気がした」
女は薄笑いを自嘲気味に浮かべた。

「……………」

こいつは、もう少しで死んでしまう。……美咲のように。

俺は美咲の一生に一度の願いを叶えてやれなかった。

俺はまた、見捨てるのか？ また、一生に一度の願いを叶えてやれないで、人を死なせてしまうのか？ そんなの……

「名前は？」

「え？」

「だから、お前の名前は？」

「付き合ってくれるの？」

「ああ。だから、名前を覚えてくれ」

そんなの、もう嫌だ。もう、あんな思いをするのは嫌だ。

美咲。お前には何も出来なかったけど、お前と同じ奴がいるんだ。俺はそいつの願いを叶えてやりたい。……許してくれるよな、美咲。

「奈月」

「名字は？」

「教えなくていいでしょ？ だって、私たちは付き合ってるんだも

ん」

こいつ……

先程まで泣いていたのが嘘のように、奈月はケロッとしていた。

「あなたの名前は？」

「龍夜^{りゅうや}だ」

詐欺にあつたような感覚を覚えながらも、俺は自分の名を口にする。

「龍夜。それじゃ、行こう？ 真夜中のデートに」

奈月は俺の手を握ると、ふふつと微笑んだ。

「！」

くそ。

今の微笑に少しドキツとしてしまった自分が情けない。

俺は奈月に握られるがままに、街へと歩き出すのだった。

奈月に連れて行かれたのは、この街の一番大きな商店街だった。

クリスマス間近ということもあり、夜の7時を過ぎていてもイルミネーションの光が街を昼間のように明るく照らしていた。

「で、どこいく気だ？」

「どこって、決まってるじゃないよ？」

「は？」

奈月の呑気な回答に俺の声が裏返る。

「カップルは、ただ二人で並んで歩いてるだけで幸せなんじゃないの？」

奈月は、キョトンとした瞳で首を傾げた。

誰に盛られた情報だよ、それは。

「……わかった。とことん付き合っよ」

約束だからな。

俺は溜息混じりに渋々了承する。

「うん。流石は龍夜。私の見込んだ男」

奈月は例のいたずらっぽい笑顔で、満足げにうんうん頷いた。

「意味わからん」

「何か言った？」

独り言のつもりが聞こえてしまったらしい。

「何も」

俺は再び溜息を吐いた。

時刻は、夜の9時を回り、商店街がシャッター街に変わる。

あれからの奈月の行動は突拍子もないことばかりだった。

いきなり、デパートの地下で食品の試食品を食い荒らしたかと思えば、次は本屋で漫画の立ち読み。

洋服店で様々なものを試着しては俺に見せ感想を求め、俺の素っ気ない感想に頬を膨らまし、結局何も買わずに店員を困らせた。

「お前、さっきのは店員に対する虐めじゃないか？」

あれだけ服を持ってこさせた拳句、何も買わないで帰られてしまったら、そりゃ店員さんも泣きたくなる。

「そうかなあ？ 私、もうすぐ死ぬんだし、許されるんじゃない？」

奈月は平然とんでもないことを言う。

そんな奈月に、俺は何も言い返せない。

「龍夜」

突然、奈月が俺の名前を呼んだ。奈月の方を見ると、奈月の目は先程と打って変わって、真剣だった。

「何だ？」

「海行かない？」

奈月の口元は笑っていたが、目は笑っていなかった。

「ああ」

断る理由もなく、俺は奈月の後を追う。

奈月の目は、今にも泣き出しそうだった。

.....

.....

.....

そして、冒頭に戻る。

「龍夜、答えて。同情なんかいらぬ。あなたが思ったことを、そのまま」

奈月に促され、俺は口を開いた。

「人は、大切な人のために生まれ、大切な人のために生きてる」
「！」

奈月は、俺の第3の回答に目を見開いた。

「生まれたから生きてる？ 生きるために生まれた？ そりゃそうだ。人は生まれたから生きてるし、生きるために生まれたんだ。そんなんの俺だって奈月だって、皆皆同じだ。でも——」

俺は一呼吸置いてから断言する。

「それだけじゃ、皆簡単に命を捨てる。それでも俺らが生きてるのは、大事な人がいるからだろ」

——俺は大事な人は、もういないけど。

最後の言葉を俺は何とか飲み込んだ。

「大事な人がいるから生きてる……」

「そうだ。自分が死ぬことによって、大事な人を悲しませたくない。そう思うから、人は生きているんだ」

奈月は砂浜をジッと見つめている。いや、ホントは何も見えてないのかもしれない。

「龍夜。私にも大事な人がいるのかな？」

奈月の肩が震えている。

「いるはずだ」

「……うん。私の大事な人は、お母さんかな」

奈月は、顔をこちらに向けた。

「そっか。私は、お母さんのために生きてたのかな。でも、お母さんはどうなんだろう？ 私、お母さんに迷惑ばかりかけてきた。きつとお母さんにとって私は邪魔な存在だよね」

奈月は涙ながらに呟く。

「お前がそう思うならそうなんだろう」

「！」

「でも、あくまで一般的な意見だが、大事な人でもない人を入院させるわけないんじゃないか？ 邪魔な存在なら、どこかにでも捨てればいい。それでも、お前の母親はそれをしなかった」

俺は奈月の目を見つめる。弱々しい、その目を。

「もう、わかってんだろ？ 奈月」

「……」

奈月は何も言わなかった。いや、言えなかったのだ。

——涙を流すことに必死で。

「龍夜！」

突然、奈月が俺の胸元に飛び込んできた。

「わかってた！ お母さんが私を嫌いなはずはないって！ でも不安だったの。誰かに、そう言ってもらえないと、信じられなくて……！」

奈月は幼い子供のように泣きじゃくった。

「龍夜！ 私怖いよ！ 全然平気なフリをしてたけど、やっぱり死ぬのが怖いの！ ねえ、死ぬってどういうことなの？ 教えてよ、龍夜……！」

俺の胸倉を掴みながら、奈月は貯めてあった思いを爆発させる。

「わかんねえよ、死んだ後なんて。でも、人はいつか死ぬ。それが遅いか早いかの違いだけなんだ。だから、お前が今すべきことはな

んだ？」

「私が、今すべきこと？」

「そうだ。お前は、その残った時間を何のために使う？」

「私は——」

奈月は、涙を服の裾で拭った。

「恋がしてみたかった。ずっと病院で暮らしてきて、恋なんてものを知らなかった」

だから、俺に付き合ってほしいと言ったのか。

……俺はどう思ってるんだ？

寒い中俺を連れ回した性悪女？

いや、違う。

奈月と商店街を回って気づいたこと。

奈月は子供っぽい性格で、わがママを言っし、店員には迷惑をかける。それでも——

笑うと、ホントに可愛い女の子だ。

「ねえ龍夜」

「ん？」

「私、龍夜に抱き締められていると、すごい落ち着くの。これがかしたら——んっ！」

俺は奈月が言おうとしていたことがわかり、奈月が言い終わる前にその唇を唇で塞ぐ。

どうやら俺も奈月のことをいつの間にか、好きになってたみたいだ。

「龍夜」

唇を離すと、奈月が潤んだ目で俺を見つめていた。

「ありがとう」

奈月は、最後に笑うと、ゆっくりと目を閉じた。

「奈月？」

奈月の名を呼ぶが、返事はない。

俺はその瞬間、全てを悟った。

人は、こんなにもあつさりと死んでしまふのだろうか？

こうやって、こいつみたいに、笑顔で死んでゆくのだろうか？

俺の頬を何かが伝った。

俺は、奈月の願いを叶えることができたのだろうか？

……出来たんだよな。

奈月のこの顔が、それを証明していた。

さよなら、奈月。

さよなら、美咲。

さよなら、俺。

もう思い残すことはない。

俺は、奈月を砂浜に寝かせ、コートを上に向けた。

奈月には、大事な人がいる。

でも、俺にはもういない。

だから、もう君の元へ向かってもいいよな？ 美咲。奈月。

俺は、荒々しい海へと歩を進めた。

「龍夜！」

「！」

刹那。背後から声がした。俺の名前を呼ぶ声が。

「な、奈月。お前……」

振り返れば、顔だけこちらに向けた奈月が必死に俺の名を叫んでいる。

「死んだら、だめ！ 龍夜は、まだ生きられるんだから、死ぬなんて、許さない！！」

俺は奈月の元へ駆け寄る。

「私は死にたくないのに、死ななきゃいけない！ それなのに、あなたは死ななくていいのに、死ぬなんて……そんなの、許さない！」

奈月は、涙をポロポロ零して、俺に訴える。

死ぬな、と。

「奈月……」

「龍夜は、私の願いを叶えてくれた。今日もとても楽しかった。だ

から、生きて。龍夜は、誰かを助けるために生きて」

その時。俺は理解した。

余りにも当たり前すぎることを。

「奈月。訂正するよ」

「え？」

「人は何か理由があるから生きてるんだな」

大事な人を悲しませたくないから、生きる。

誰かを助けたいから生きる。

死ぬのが怖いから生きる。

大切な人のために生きる、はその中の一つでしかない。

人はそうやって生きているのだ。

「なら、龍夜」

「なんだ？」

「私の分も、生きて」

奈月はそれを言っていると、気を失った。

いや、奈月はもう……

俺は奈月を背負った。酷く軽い奈月の体を背負いながら、俺は近くの病院を目指して歩く。

奈月。

俺は生きる理由を無くしていた。でもな。生きる理由が出来たよ。お前が、俺の生きる意味を作ってくれたんだ。

俺は、大事な人に生きると言われたから、生きていくんだ。

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます！

いかがでしたでしょうか？

どんな酷評でも指摘でも構いませんので、感想など書いていただくと凄く嬉しいです！

自分では、この小説を読んで読者がどう思うのか全くわかりませんので。。

よろしく願いますm（＿）（＿）m
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6656r/>

Raison D'etre

2011年3月16日19時40分発行